

精神保健福祉援助実習における実習生の学びの深化と困難

—卒業生に対するインタビュー調査を通じて—

○聖学院大学 心理福祉学部 小沼 聖治 (8541)

キーワード：精神保健福祉援助実習，精神保健福祉士，実習生

## I. 研究目的

本研究は，精神保健福祉援助実習（以下，実習）における体験を通じて，実習生がどのような学びや気づきを得ているのか，また，そのきっかけや支えとなる要因を明らかにすることが目的である。

精神保健福祉士を取り巻く環境や求められる役割の変化をふまえ，養成カリキュラムの見直しの検討が議論されてきた。そして，2021（令和 3）年度より，精神保健福祉士（以下，MHSW）養成教育が新カリキュラムに移行予定である。実習に関しては，これまでにその充実を図るために，実習指導者や実習担当教員の要件強化，精神科医療機関での実習の必須化等がなされた。

実習教育に関する先行研究を概観すると，実習生の意識変化に着目し，分析・検討が重ねられている。そのなかで，実習を通じて，実習生の自己覚知や精神障害者に対する共感的理解，連携・協働する他職種の専門性，そして精神科医療の現実に関する体感的な理解が深められることが明らかにされている（坂本 2002；宮崎 2004；吉池 2006；中村 2008；岡田 2017）。現行の養成教育カリキュラムが開始された 2012（平成 24）年度以降においては，実習指導における実習生の自己評価の重要性も指摘されており，実習生の学びの深化のサポートについて，さらなる議論の必要性が考えられた。また，本研究の成果は，来年度からの新カリキュラム開始に向けて，実習教育・指導のあり方を検討する基礎資料になると考える。

## II. 研究の視点および方法

調査対象者は，2018（平成 30）年度に A 養成校の精神保健福祉士一般養成課程に在籍した卒業生 9 名である。2019 年 6 月 30 日に A 養成校の一室にて，半構造化によるグループインタビュー調査を実施した。所要時間は，休憩を含み 2 時間程度であった。

インタビュー調査では，①実習で特に学びを得られたと感じた体験内容やその体験を通じた認識の変化，②実習中に受け入れられていると感じた場面や困難を感じた場面について，具体的な内容を尋ねた。

分析では，質的記述的研究方法を採用した。具体的なプロセスとして，IC レコーダーで録音したインタビューデータをテキスト化した後，実習生の学びや認識の変化，それらを支えた体験に関する記述を抜き出し，それらの記述にコードを付与しオープンコーディングを行った。次に，語りの類似性にしたがって，サブカテゴリー，カテゴリーを作成した。分

析結果の妥当性を担保するために、分析のプロセスにおいて、実習指導・教育経験がある MHSW とメンバーチェックを行った。

### Ⅲ. 倫理的配慮

本研究は、聖学院大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：第 2019-3b 号）。

また、調査依頼時ならびにインタビュー当日に、調査協力者に対して、個人情報保護や研究の協力を途中で中止することが可能であること等、研究倫理に関わる事項を分かりやすく説明した。また、グループインタビューのため、他の協力者に聴かれない内容もあると想定されることから、答えにくい質問は無理に回答する必要はないことも併せて説明した。これらによって、一切の不利益が生じないことを確認し、口頭ならびに文書にて同意を得た。

### Ⅳ. 研究結果

#### 1. 調査協力者の基本属性

調査協力者の基本属性を以下に示す（表 1）。調査協力者は 9 人で、性別は女性 5 人、男性 4 人であった。年齢は全員が 20 代で、インタビュー当時の所属機関は、精神科病院 5 人、就労継続支援（B 型）事業所、福祉施設（入所型）、福祉事務所、児童放課後等デイサービスがそれぞれ 1 人ずつであった。

表 1 調査協力者の基本属性

協力者	性別	年齢	所属機関（インタビュー当時）
A	女性	20 代	就労継続支援事業所
B	女性	20 代	福祉施設（入所型）
C	女性	20 代	福祉事務所
D	女性	20 代	精神科病院
E	女性	20 代	精神科病院
F	男性	20 代	精神科病院
G	男性	20 代	精神科病院
H	男性	20 代	精神科病院
I	男性	20 代	児童放課後等デイサービス

#### 2. 分析結果

実習生が特に学びや気づきを得られた体験やその体験を通じての認識の変化、それらの学びや気づきのきっかけや支えについて、分析結果を示す。

### (1) 実習生が特に学びや気づきを得られた体験やその体験を通じての認識の変化

実習生は、【現場の精神保健福祉士との日々の対話】によって、＜クライアントに対する逆転移の気づき＞や＜言動が与える影響力の自覚＞が芽生え、講義で学んだ＜法律の事業内容にとどまらない支援やサービスのあり方＞を考察するきっかけにつながった。また、病棟の行動制限に対する疑問や【クライアント自身の直接的なメッセージ】を受け取ることで、専門職のメッセージと異なり、＜医療と福祉の立場や考え方の違い＞や＜説明責任の重要性＞、そして、実習生自身が病気や障害ありきでクライアントを理解しようとする＜内なる偏見への気づき＞が促進された。

### (2) 実習生の新たな学びや気づきのきっかけや支え

実習生の新たな学びや気づきのきっかけや支えとして、実習指導者や実習担当教員との【実習スーパービジョンによる多角的な視点の気づき】や実習指導者の【辛抱強いサポート】によって得られた居場所感が生まれていた。

## V. 考察

実習生が特に学びや気づきを得られたと感じる中心的な体験は、精神障害者本人との直接的なかかわりの場面といえる。それだけ当事者自身の生きた語りは、実習生にリアリティショックを与え、自己覚知の深化をもたらすものと考えられた。この自己覚知は、クライアントとのかかわりによってもたらされるものであり、自己洞察にとどまらず、自己統制の心構えにもつながる(宮崎ほか 2004)。また、実習生自身では整理しきれない感情や考えを整理するために、実習指導者や実習担当教員との相互作用を活かした実習スーパービジョンの重要性(岡田 2017)が示唆された。

## 注

精神保健福祉士は、これまでの歴史で精神科ソーシャルワーカー (Psychiatric Social Workers) が前身であることから、その頭文字をとって PSW と略称されてきた。しかし、昨今のメンタルヘルス課題の多様化に伴う精神保健福祉士の支援対象の拡大等に伴い、数年間に亘る様々な議論を経て、2020 (令和 2) 年 6 月の公益社団法人日本精神保健福祉士協会第 8 回定時総会において、定款変更の決議がなされた (英語表記及び略称の変更)。

上述の流れを踏まえ、本研究では、MHSW (Mental Health Social Workers) の略称を採用した。

## 文献

グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江編 (2016) 『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 第 2 版 看護研究のエキスパートをめざして』医歯薬出版株式会社  
宮崎まさ江・小片富美子・上平忠一・ほか (2004) 「精神保健福祉援助実習前と後における

- 学生の意識調査」『長野大学紀要』26 (2), 141-52.
- 中村卓治 (2008) 「精神保健福祉援助実習の現状と課題に関する考察：障害者に対する学生の意識変化をもとに」『人間福祉研究』(6), 15-27.
- 岡田洋一(2017) 「精神保健福祉援助実習における学生アンケート調査から見えてきた学生の学び」『福祉社会学部論集』36 (2), 53-66.
- 坂本智代枝(2002) 「精神保健福祉援助実習教育のあり方に関する一考察－学生の初期の「内的なかかわりの過程」の質的分析を通して－」『大正大学研究紀要』(87), 355-66.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法－原理・方法・実践』新曜社.
- 吉池毅志 (2006) 「精神保健福祉士になっていく過程と実習--現場実習が私たちに問いかけるもの (特集 福祉専門職養成, 福祉実習, 福祉教育の実際)」『福祉労働』(112), 28-35.